

A dramatic sky with dark, heavy clouds and a faint rainbow in the center. The clouds are layered, with some appearing as soft, white wisps and others as dark, brooding masses. The rainbow is a soft, multi-colored arc in the middle ground, partially obscured by the clouds. The overall mood is atmospheric and somewhat somber.

ふ  
た  
り  
た  
び

山  
本  
海  
雲

ふたりたび

山本  
海雲



# 序章

\*\*\*

成田発バンコク行きUA881便、2010年4月12日は4月も半ばにもかかわらず、朝からの曇り空が夕方には冷たく細かい雨となって音もなく降り注ぐような肌寒い天気だった。

—長い旅に出る。—

そう決めたのは昨年12月の終わりの頃だったか、当初オーストラリア方面へ1週間～1ヶ月程度の軽い旅行を考えていた私は、東南アジアというキーワードをパートナー（当時はまだパートナーと呼べるような間柄ではなかったが。）から電話で聞かされた途端に、むくむくと長旅のイメージが膨らんでゆき、どうせならインドまで行かないか、とその電話でパートナーを誘ったのを覚えている。

ふたりで旅をする、という結論にもあまり抵抗なく行き着いた。付き合ってもいない未婚の男女がふたりきりで長い間異国を旅するというのはどう考えても普通ではないのだが、お互いにももしも相手が行かなかったとしても一人で旅をする、という結論に落ち着いたため、ではふたりで行った方が経済面でも安全面でも何かと融通が利く、という比較的単純な理由（少なくとも私は、だが。）から同行が決まったのである。

（結論からいうと、結局旅に出る前にパートナーとはお付き合いすることになったのだが、その顛末は別の話となるので割愛させていただくことにする。）

さて、そうと決まったら何かと準備が必要になる。

バックパックから始まり、こまごまとした生活用品、航空チケットや保険の手配、そしてなにより頭を悩ませたのが旅に出ている間の自分たちの荷物の置き所だった。

知り合いの伝手を辿り、10年ほど家具や荷物がそのまま放置されたままの古い家屋を安く借り、掃除におよそ2ヶ月かけ、ようやく荷物を運び込んだのが3月の初旬である。

落ち着く暇もなく最後の仕事になんとか決着をつけたのが3月の下旬、晴れて出発を待つのみとなったのは出発の2日前だったと記憶している。

出発の前の晩は、これから始まる旅生活に対するときどきやわくわくよりもむしろ、これまでの準備期間で想定していた準備がひと通り滞りなく完了したことに対する安堵の方が確実に勝っていた。

出発当日、フライトの時間は夕方だったため朝から軽く掃除をした。

しん、とした部屋は一応の主人たちがこれから長くここを空けることを知っているかのように、気のせいかな少しだけ部屋の空気は湿っていた。

玄米（ちょうど白米が切れたため。）を炊き簡単な食事を摂り、ガスの元栓を閉め、ブレーカーを落とし、戸締りを確認した頃には、長い旅に出るのだな、とぼんやりと自覚し始めていた。

旅の重要なお供であるドイターのバックパックを背負い家を出る。これからの旅の重さを背に感じ一歩踏み出すと、身体の重さとは裏腹に何かから解放されたようにふわり、と気持ちが軽くなった。だがそれと同時に、日々暮らしたこの国の日常風景が、気持ちが軽くなった分と同じだけ自分から遠い存在になったように感じる。

旅のテーマは？、と出発前にある友人に聞かれたことがある。

その時は何かもっともらしいことを答えていた（15年前の旅のリベンジ、などと言っていた。）ように記憶しているが、正直言って無い。

確かに大層な時間を割いて、居心地のよろしくない異国を苦勞して転々と動き回るのだから、わざわざそんなことをするにはそれなりの理由が必要であると考えるのは当然と言えば当然である。

しかし私はこう思う。

一旅は逃避だ一、と。

どんなにもっともらしい理由を並べたとしても、旅とは現状からの脱却であり、環境の刷新であることに変わりはない。しかし旅をすることに関しては、その動機がマイナスに働くことはあまり無いように思う。何故ならこの地球上で物理的に何かから離れることは、同時に何かに向かってゆくことでもあるからだ。言い換えれば、“物理的に移動する”この一点だけが旅を救いのあるものにしていても言えるかもしれない。

歳を重ね、ひとつの常識、習慣、ルールに慣れてくると生きることが容易くなっていく。そしてそれはある側面ではとても良いことでもある。しかし別の側面から見たとき、それは少し窮屈に感じることもある。

そんな時に旅は効果を発揮する。旅に出た瞬間、“しなければならない”ことが無くなり、“すべき”ことだけが目の前に多くぶら下がる。旅の途中、自分とそれに付随するものがどんどんシンプルになっていく。旅の後、自分を囲っていたフレームにいつのまにか“あそび”が出来ている。

もちろんそれが旅の全てではない。しかし旅の後には高い熱を出した後のようなスッキリとした妙な爽快感が残るのは私だけではない筈だ。

ゆっくりと動き始めた航空機の轟音は、力尽くでこの国の社会から私を引き剥がすかのように力強い唸りを上げ、“ここではないどこか”へ続く滑走路へ悠々とその身を運ぶ。

—用意はいいか？—

フライトを待つ間、私は別れを告げていたと思う。

—よし、では行こうか。—

16時35分、日本と呼ばれる大地から離れ、なんとも容易く私たちの長い旅は始まったのだった。

# タイ前編



## 1. たびのはじまり

---

タイ、バンコクのスワンナプーム空港は東南アジアの玄関としての風格充分に私たちを出迎えてくれた。

目も眩むような明るい照明やピカピカに磨かれた床、判り易い誘導サインで迷うことなく降機から入国審査～バゲッジクレームでの荷物受取りまで滞りなく移動と手続きを終えることができる。

この空港は2006年9月28日に開港され、元々国際空港として機能していたドンムアン空港からその役目を引き継いだ新空港である。もちろん新しいだけでなく、その規模、清潔感のある近代的なデザイン、空港で働くスタッフたちのマナーやホスピタリティは、東南アジアのハブ空港として十二分に意識されており、実際にこれから東南アジアを訪れる際には、多くの人がこの空港を利用することになることと思う。

ただ、新しい空港だけに市街地中心部への輸送手段が少ないことがこの新空港の唯一の弱点と言ってよい。日中はスカイトレインが運行していたり、巡回バスでの近くのバスターミナルへの無料のトランスポートサービスなどがあるのだが、24時間体制の空港では深夜近くや早朝に到着することも少なくない。こういった場合、市街地へとそのまますぐに移動できる手段が高額なタクシーやトゥクトゥクしかないのである。

そしてそれは私たちの身にも当然のごとく降りかかってきた。

何故なら格安で入手した航空券とはそういうものだからだ。

23:10バンコク着の便は入国手続きや荷物の回収にかかる時間を入れると24:00を少し回る。私たちがひと通りの手続きを終え、スワンナプーム空港のロビーで自由の身となったのは案の定24:00を回った深夜と言ってよい時間であった。

一さてどうするか。

ひとまず空港のインフォメーションカウンターで何か方法がないかを確認してみるが、返ってくる返事は軒並み、「バス イズ フィニッシュ！ノー ポッシブル」であり、次にやはり「タクシー」か「トゥクトゥク」である。

ちなみに「トゥクトゥク」とは荷台部分が座席になっており、4人程度まで乗ることができる小さな3輪トラックがそう呼ばれている。2～5km程度の短距離移動であれば100円前後で済む便利な移動手段で、一応料金の相場はあるにはあるのだが、状

況や相手によってドライバーの一存で決定されるため、長距離の場合や相手が相場を知らないツーリストの場合、今回のように他の移動手段がない場合などには足元を見られて大抵とんでもない値段を吹っかけられることが多い。（恐ろしいことに私たちはこの3つの条件をパーフェクトに満たしているではないか！）

次になんとか空港のエントランスを出て、バスが止まりそうな気配がする辺りまでウロウロしてみる。しかし、エントランスの前にはいかにもふっかけて来そうなサイケな色合いのタクシーがズラッと並んでおり、そのドライバーと思しきおじさん達が獲物を狩る猟犬のような眼光で鋭くこちらを値踏みしてくるため、探索もそこそこに空港内に退散せざるを得なかった。

同じ飛行機で降りたと思われる人々の多くは、迎えの車や乗り合いバン（今から考えるとこれは恐らくホテルの送迎車ではなかったかと思われる。）で颯爽と空港を後にしてゆく。

なるほどそうである、航空券を予約した時点でももちろん到着時刻は判っている。ガイドブックにも深夜着の場合バスが無い、と書いてあった。それらの情報を収集、分析するまでもなく、それなりにスマートな人物であれば到着初日のホテルくらいはブッキングをしているであろうし、旅慣れた玄人であればそもそも深夜に到着するような便には乗らないだろう。

そう、私たちはご覧の通り旅のど素人である。

私は15年前に一度だけ東南アジアから南アジアまでを旅したことがあるが、15年前の情報などほぼ役に立たないし、そもそも多くのことを忘れすぎていてどうにもならない。基本的に情報を収集し、分析、検討した上で計画して物事を進めるタイプであるが、プラスアルファで相当な気分屋であり理詰めな割に最終的に勘に頼ったり、気分が乗らなければ無かったことにしてしまったりするなかなか面倒臭い性格をしている。

一方パートナーといえはニュージーランドで4年間の海外留学経験があり英語は流暢に使いこなせるが、このような長旅は初めてであり、アジア自体も初上陸。人と競ったり争うことが嫌いで、植物（野菜と多肉）をこよなく愛し、ものごとを順序だてて考えたり説明したりするのは大の苦手、思考も行動も基本的にはその時の感情と環境によって多くが決まるという、こちらもなかなか扱いづらい性格のふたり組である。

格安航空券の安さだけに飛びつき、ガイドブックも適当に目を通しただけ、一応深夜

着であることと移動手段がなくなることは頭の片隅に置いてあったが、そのまま今の今まで埃をかぶったまま、ふたりで一度たりとも話し合うことなくここで呆然と阿呆のように立っている始末。今さら埃を払っても後の祭りだ。その使いどころはもう少しだけ過去だった。

しかしながらこちらは一応それなりの学校教育を受けたいい大人ふたりである。いつまでもかかしのようにつっ立っていても空港の清掃スタッフの邪魔になるだけで何も産み出しはしない。自分たちがこれまで積み重ねてきたであろう知識と経験、そして現在の状況に基づいて次のアクションを決定しなければならない。

そう、旅はもう始まっているのだ。

果たしてふたりの英知を結集して私たちが導き出した答えは、一空港のロビーのベンチで寝る。一、であった。ひとつに深夜12時をまわりふたりとも疲れ果てかなり眠かったこと、ひとつに同じ移動距離で安く移動できる手段を知っているのにわざわざ高いお金を払いたくなかったこと、ひとつに今市街中心地に辿り着いたところで、ホテルやゲストハウスが空いている保証がないことなどが主な理由であった。

さらにそのつもりになって周りを見回してみれば、空調は程よく効いているし、清潔そうなベンチもたくさんある。

同じような境遇であろう人たちもヨーロッパ人、アジア人問わずそこかしこのベンチで寝ているし、トイレやコンビニ、カフェなどもきちんと揃っている。なにより警備員や空港スタッフなど周囲に人の目がたくさんあるので、なるほど下手なゲストハウスに泊まるよりもよっぽど安全で快適かもしれない。

閉店したレストランの前にふたつ並んだ手頃なベンチを見付け、バックパックを足元に置き、貴重品の入っているサブバッグは身体から外さずにベンチに横になる。ひんやりとしたメタルのベンチは寝心地が良いとは言えなかったが、フライトと旅が始まった興奮で疲れた私たちの身体をできる限りやさしく受け止めてくれたように思う。

\*\*\*

翌朝、バンコクで旅人や所謂バックパッカーが集うエリアであるカオサン地区に私たちが到着したのは8:00~9:00頃であった。

ローカルバスを乗り継ぎ、いまいちよく分からないながらも行きたい地区の名前をことある毎に連発し、周囲の人の親切に助けられ、なんとか辿り着いた次第である。深夜のトゥクトゥクに比べれば充分安い移動費で辿り着けたことと、ちょっとだけバンコクのローカルな生活を垣間見ることができただけで、旅の素人としては満足であった。

カオサン地区はまだレストランやカフェ、その他のショップやTシャツなどを売る露店も開くか開かないか位の時間帯でひっそりとしており、私たち以外に道を歩いている人もまばらである。旅人やバックパッカーがここに集まる理由は幾つかあるが、その最も大きな理由は所謂安宿がここに多く集まるからであろう。

私たちも例に漏れずその安宿を求めてここにやってきたのだ。これから先、どの国のどの街に着いたとしても、宿探しはその街で最初の仕事となる。

もはや有名となり過ぎてしまって、あまり安宿とは呼べないような中級のホテルなどが多くなってしまったカオサンロードを避け、チャクラポン通りを挟んだチャオプラヤー川沿いのプラ・アシット通りで宿探しをすることにし、点々と開いているゲストハウスを幾つか物色する。

ガイドブックなども参考にするが、軒並み値上がりしていたり、安い部屋が満室となっていたりでなかなか思うような部屋が見付からない。少し諦めムードが二人の間に漂い始めた頃、もうプラ・アシット通りも終わりに差しかかる辺りに一軒のゲストハウスをパートナーが見付けた。

「New Merry V」と紫を基調にピンクと黄色があしらわれた大きな看板が通りに面したATMの前に置いてあり、その看板の左側が広く奥行きのある通路スペース、黄色いベンチがふたつみっつ連なる前には小さな旅行代理店とインターネットカフェが並び、その奥に黄色いカウンター、そのまた奥は小さな中庭という造りで、背の小さなタイ女性がひとり、気だるそうに受付に座っている。

この旅の一日の予算をおよそ¥2,000/1日と試算していた私は宿泊代を250B~350B（1B=¥2.7~2.8：2010年4月当時）程度に留められることを理想としていたのだが、数軒のゲストハウスに予想よりも30~50%以上も高い450B~600Bという金額を提示され

続け、もはや諦めの境地で少々不機嫌になりつつ、一どうせここも一などと考えていた。しかし念のため聞いてみようというパートナーに促され、渋々とではあるがこのエントランスをくぐってだるそうにしている受付の小柄なタイ女性に精一杯の作り笑いを投げかけた。

提示された金額は330B、ふむ、悪くない。高めではあるが一応理想範囲内ではある。少し欲を出して滞在日数を告げ、多少の値引きに応じてもらえるか交渉してみるが、それはにべもなくあっさり断られた。（今思えば値引き交渉もものすごくヘタクソであったことは否めないが。）適当にえへへ、などと笑ってごまかし部屋を見せてもらう。

Wベッド、シーリングファン、バスルームのトイレは一応西洋式の水洗でホットシャワーも使え、換気扇もついているようだ。戸締り、電気系統、水周りも問題なさそうだ。部屋は狭いが中庭に面しており、窓はひとつしかないが風が貫けるのか部屋の空気はこもった感じはなく、淡いパステルブルーに塗られた壁も手伝って比較的爽やかで居心地は良さそうだ。

この後何度かカオサン地区の他のゲストハウスをチェックする機会があったが、カオサン地区のゲストハウスの部屋は窓があっても廊下などに面していて、コンクリートの雑居ビルの狭い一室のような部屋が多く、風も貫けず一日中暗い割に夏場のタイの強烈な日差しにビル全体が暖められ、不快な室内温度と湿度になっていることが特に安めの部屋には多かったように思う。

居心地の良い宿はその土地の印象を好印象にがらりと変えてしまい長居するかどうかを決定する程重要な要素なので、重いバックパックを背負っていたとしても体力の続く限り拘るべき部分である。旅をする上で最も拘るべき部分と言い切ってしまうても良いかもしれない。

セキュリティ、電気系統、水まわり、換気など確認すべき点は幾つもあるのだが、その中で最低限そこだけはクリアしておかなければ快適どころかすぐにでも宿を移りたくなってしまおうようなポイントがいくつかある。

まず戸締りについては、南京錠で施錠できるタイプのものの方が自分で持参した鍵が付けられるので安心感がある。それに窓に鉄格子が嵌められていると、夜寝る時などに部屋の換気をする際にも安心だ。（それでも窓近くに貴重品や電子機器などは置かない方がよい。竿などで手繰り寄せて盗まれる場合もある。）

宿のスタッフがたいした用もないのに何度も部屋にやってきたり、頼んでもないものを持ってきたりする宿は要注意。宿のスタッフによる窃盗の恐れや、宿泊客が女性の場合は覗き、痴漢、最悪の場合レイプなどに発展する恐れもある。そこまで大袈裟ではなくとも何かと落ち着かなかったり、無駄にチップを強要されたりと不快な思いをさせられるだけであまり良いことはない。部屋チェックの際に案内してくれるスタッフの態度や挙動などには充分注意すべきだ。

電気系統では照明が点くかどうかはもちろんだが、ファンの強弱の調節が可能かどうかは結構重要、中にはファンは回るが強弱の調整ができない部屋が時折あり、点けて寝ると寒いと止めると暑い、などというどうにもならない事態になったりする。

東南アジアのホットシャワーが使える部屋では電気式給湯器の場合が多いため、これがきちんと作動するかも使い方も含めて確認・チェックした方が良い。また、キーを部屋の中の所定の位置に挿さないと電気が使えないタイプの部屋は、外出時にファンを回しておいたりできないため、洗濯物の乾き具合や部屋の換気などの面から考えてできれば避けたい。

コンセントの位置にも注意。日本のように低い位置にコンセントがあることはめったになく、大抵壁の中ほど、人の腹から胸辺りまでの高さに設置されていることが多く、さらにコンセントの穴自体もプラグを挿しても固定されないような緩いものが多いため、コンセントの近くに程よい高さの台などが無い場合、短いケーブルの電化製品等が使えないなどの歯痒い思いをしたりもする。中には部屋にコンセントがないところもあるので見落としがちだがちゃんと確認した方が良い。

水まわりも重要だ。水が出るかどうか、ホットシャワーの場合はお湯が出るかどうかは基本だが、臭いもチェックした方が良い。鉄臭い水がずっと出るようなゲストハウスは他の部分でも管理が杜撰な可能性があるし、臭いが酷い場合にはシャワーを浴びると気分や体調が悪くなることもある。またバスルームに限った話ではないが、部屋に入った瞬間黴臭い部屋は換気の問題があると考えてよく、大抵シャワーを使った後などに部屋に湿気がこもる場合が多い。

バスルームの排水にも注目しておきたい。シャワーを使っているとだんだんと水が溜まってきたりする場合があり、触りたくもない排水溝を触らなくてはならない羽目になったり、酷い場合には水がまったく流れず、シャワーを途中で切り上げて泡だらけでホテルスタッフを呼ばなくてはならなくなったりする。シャワーなどから水をしばらく流してチェックすると良い。

最後に換気に関して、部屋を見せてもらう際は大抵部屋を開け放つなどして充分部屋の暑気や臭いなどを払った後なので、その時の快適度はあまり参考にならない。窓が二つある場合はその二つが風を通す位置にあるかどうか、ひとつしかない場合はバスルームなどに換気扇があるかどうかは最低チェックしたい。

また、蚊の多い地域などでは網戸はかなり重要だ。東南アジアや南アジアではデング熱やマラリアなど、蚊が媒介する伝染病には充分気を付けなければならないため、網戸がないと結局窓を閉め切った状態で滞在期間を過ごさなければならなくなったりする。蚊に限らず、放熱のために天井近くの壁が吹き抜けになっていたりする部屋では、夜半に部屋の明かりに惹かれて大量の羽虫が部屋に入ってきて不快な思いをしながら寝なくてはならない羽目になったりすることもある。

その他ベッドマットの硬さや清潔感など、個人的な感性で必要な要素はそれぞれあるかとは思いますが、この旅で得た部屋を見る際のチェックポイントとしては、この辺りを押さえられれば比較的快適に過ごせるのではないかと個人的には思う。

ちなみに「New Merry V」をこの条件に当てはめると、キーを挿さないと主電源が入らない（しかしこれは厚紙を折って挿すことでクリアした。）ことと、バスルームの排水に多少の難があることの2点以外は一応クリアしていた（私たちが泊まった中庭に面した部屋限定ではあるが）。当時は別段そんなことは思ってもいなかったが、旅の最初に選んだにしては奇跡的に値段、条件共に申し分ない上々な部屋である。

寝たとはいえ、空港の硬く冷たいベンチで周囲に常に人の気配を感じながら非常に浅い眠りしか得られていなかった私たちは、他にアテもないためここに腰を落ち着けることにした。記念すべきこの旅初の宿である。そしてこの「New Merry V」は、何かと便利なのだが宿泊代の高いバンコクにおいて、この一ふたりたびーには最初から最後まで欠かせない宿になることになるのであった。

## 2. ソンクラン

---

朝の6:00からずっと担ぎっぱなしだったダイターのバックパックをようやく肩から降ろせたのがもうすぐ太陽も真上に差しかかる頃合であった。とりあえずシャワーを浴び、束の間、ベッドマットの硬さを確かめるかのようにふたりとも少々はしゃぎながらベッドに横になって休息を取る。

しかしまだまだ旅の入り口付近である。日本で蓄えた無駄なエネルギーはふたりをあまりじっとはさせてくれないらしい。なにせ久々の海外であるし、旅への期待と興奮はおそらく最もピークに達している時期だ。身体が軽くなると、むずむずと周辺を散策したくなってくるのは仕方がない。

荷解きもそこそこに昼食がてら散策したいとパートナーに告げ、貴重品と携行品の入ったサブバッグを肩から提げ、この旅のために買ったOlympas Pen E-P2を準備する。サブバッグには、パスポートやT/C（トラベラーズチェック）、クレジットカードを始めとした貴重品類と、小さく折りたためる帽子、サングラス、ガイドブック、応急手当セットや筆記用具とメモ帳などのこまごまとした身の回りの品がコンパクトに収まっている。

ちなみにサブバッグとしてはリュック型のデイバッグよりも、肩掛けバッグの方が好ましい。

肩掛けバッグは雨蓋のあるものがベストで、多少の撥水が効くものが良い。急な雨にも心配しないで済むのはもちろんのこと、雨蓋があるとスリなどの盗難被害にも遭いにくくなるし、ジッパーなどでポケットが細かく分けられているものが多いので、デイバッグのようにメインポケットが大きいものよりも比較的携行品や貴重品の整理がし易く、また、バックパックを背負ったときなどにデイバッグは胸側に抱えるような形になるため、バスのチケットや小銭を出し入れする時などにも肩掛けバッグの方がなにかと利点が多い。

小型であればあるほど身軽にはなれるが、それなりの大きさのカメラなどを隠しておきたい場合やショップなどでお土産物を買ったりした時の収納用に、少し大きめで携行品を収納してもスペースに多少余裕があるものがベターだ。

難点としては片側の肩に重さが掛かるため、長い時間ウロウロすると片側の肩だけ疲れてきたりするが、これは掛ける肩を時折変えることである程度緩和できる。

パートナーは外に出るとなると日焼け対策を怠らない。顔にはUV化粧品、腕や脚には



サンスクリーン、と準備に余念がない。女性としては当然の処置であるし、特にパートナーの場合、太陽のような強い光に弱い、という弱点（光過敏という、強い光線の中で長時間居続けると肩ががちがちに凝ってしまったり、酷い時には頭痛で動けなくなってしまうりする体質。）があるため、殊更準備は怠らないのであるが、早く外に出たい私の心情としては待っている間むずむずが止まず、無意味に部屋のドアを出たり入ったりして、十中八九伝わらないであろうアピールを続けてみたりしながら彼女の準備が終わるのを待つのがだった。散歩に連れて行ってもらえそうな時の犬の気持ちがよく理解できる瞬間である。

晴れて完全武装が終わった彼女にGoサインを貰った私は、もし尻尾があれば千切れんばかりに振っていたことだろう。

4月のタイはサマーシーズン真っ只中だ。当然日差しの強さは午前中から相当なもので、10:00をまわれば歩いているだけで汗が滲み出してくる。雨はたまにまとまって強く降る程度で、日本の夕立ちをもっと強烈にした豪雨と言ってもよいような雨が1～2時間降ると、その後カラッと晴れ上がり、濡れた路面も急速に乾いていく。

5月頃まではこのような天気が続き、6月頃から雨が多くなってくる。雨期は6月～9月頃まで続き、蒸し暑く、晴れていても常に遠くの空のどこかしらで雷が鳴っていたり、夜には遠い稲光で大抵夜空がぴかぴか光っていたりする。

10月～1月の乾期は雨がほとんど降らなくなって乾燥し気温も過ごしやすい温度になってくるが、その分朝夕は少し冷え込むのでTシャツだけ寝ていると寒い日も結構ある。

\*\*\*

---

とりあえずカオサンロードまで行って昼食を摂ろうということになり、うきうきとカメラを振り回しながら歩いていると、プラ・アシット通りから一本路地に入ったところの民家らしき家でなにやらごそごそ人の気配がする。

路地の日差しの強さで屋内は暗く中の様子はわからない。声を殺した子供のクスクスという笑い声も聞こえなにやら楽しそうだ。新しい一眼レフカメラで撮るタイの子供たちの笑顔。一などと勝手ににやにや想像しながら民家の入り口あたりでカメラを構えようとした瞬間だった。

入り口から子供がふたり飛び出す。

手には何やらカラフルな手桶のようなものを持っている。

子供の弾けんばかりの小麦色の笑顔。

それと同時に何かをアンダースローで投げるアクション。

空間にきらきら光る何か。

一連の動作が眩しい日差しの中で柔らかくぼやけ、美しい写真のスライドショーのようだった。

そして一。

腰の辺りから脚にかけて何やら冷たい感触。何が起こったか分からないまま、子供たちはその高い笑い声と共にまた家の中の闇へと消えていった。

私はカメラを構えた姿勢のまま、パートナーと顔だけ見合わせる。次にそのままの姿勢で自分の下半身を見つめる。さっきジーンズからはき替えたばかりのカーキ色のバミューダショートパンツがびしょりと余すところなく濡れて黒く変色している。一なるほど。ようやく事態を把握した。どうやら想像以上の量の水を掛けられたようだ。

しかし何故？

回答を得られないことは知っていながらも、困った顔をして問題の答えを先生に求める子供のようにパートナーをもう一度見てみる。「答えは自分で見つけなさい。」とでも言うかのように私の顔を見てパートナーは優しく苦笑した。どうやら濡れたのは私だけらしい。

パートナーと一緒に道を歩いていると、私の足が速いのか、パートナーの足が遅いのか、大抵私がパートナーの先を歩く形にいつのまにかなっている。もちろん、この時も私が少し先を歩いていた。パートナーは私が水を掛けられているのを見て、自分に向かってきた子供たちの水攻撃は何とかうまくかわしたと言う。少し腹立たしくも確かによく見ると、パートナーの服にも少し水が掛かっていた。

子供たちは私に水を掛けた後、一度家の中に設置してあると思しき水桶に水を汲みに戻り再度パートナーを標的に切り替え向かってきたため、このタイムラグがパートナーに判断の時間を与え、幸運な結果となったのだろう。やや腹立たしいが、私の犠牲によって彼女が助かったことを誇りに思いたい。

カオサンエリアまで来る途中、何度か「今日はフェスティバルなんだ。」と聞いた。

「タイ正月」というのもどこかで耳に挟んだことがある。日本の正月よりも2～3ヶ月ほど遅かったはず。「タイで水を掛け合う祭りが行われる。」というのも、TVだか雑誌だかで一度か二度は見たような気がする。

なるほど、確かに知ってはいる。しかし、こういった断片の情報は得てしてそのものに出会ったときにすぐには結びつかない。「鼻が長い。」、「大きい。」、「灰褐色。」などの情報を事前に見聞きして、いざ初めてジャングルの中で象に出会っても、それが象であることに気付くのは大抵事後であるように。

ーソクラン。ー

そう、まさに私たちはジャングルで象に初めて出会った冒険者よろしく、異国に降り立ったその日にタイの正月に行われる水かけ祭り「ソクラン」の洗礼を見事に浴びてしまったのだった。特にこのカオサンエリアはバンコク内でも一際激しく水掛けが行われるエリアとして有名で、この時期にやってくるツーリストたちは好む、好まざるを選ばず、食事をする、買い物をする、バスを予約する、などの日常の活動の度に容赦なく水を掛けられることを余儀なくされるのである。

ふと、我に帰った私は慌ててカメラをチェックする。そう、このソクランで最も恐ろしいのはカメラや携帯電話などの電子機器の水による故障である。

ある程度分別が判ってくる年齢であれば、カメラなどを避けて優しく水をかけてくれるような配慮もあったりするのだが、テンションの上がった幼い子供たちこそがこのソクランにおける最大の敵と言ってよい。彼らにかかれば、旅行者だろうがローカルだろうが、男だろうが女だろうが、若者だろうが年寄りだろうが分け隔てなく水を掛けては走って逃げて行く。

この旅のためにわざわざ購入した最新のカメラで、日本で試し撮り程度には使ったものの、本格的に使うのはこの旅から、と心に決めてやってきた私のような者にとっては、これほど旅の目的を半減させ、且つ旅のテンションを下げるものもないほど恐ろしい。

幾つかスイッチを押してカメラの挙動を確認してみるが特に変わった動きはない。どうやらカメラは無事なようだ。ふうー、と安堵の溜息をひとつついた私は、パートナーに向き直り、一度ゲストハウスに戻ろう、と告げた。その顔はかなり深刻だったに違いない。パートナーも二の句を告げずに頷いた。